

おわりに

『学力を育てる』(志水宏吉 2005 岩波新書)の中に、学力の構造について触れられている部分があり、学力を三つに分けて捉えています。第一は、知識の詰め込みで獲得することができ、筆記試験等で容易に点数化できる狭い意味での学力で、これを“A学力”，第二は、筆記試験で測ることは難しいが、学校での成績や試験の成績に大きくかわる学力の要素の思考力・判断力・表現力で、これを“B学

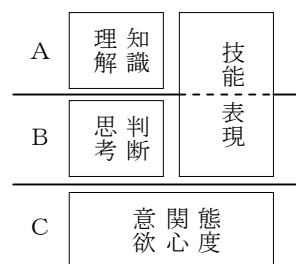


図1

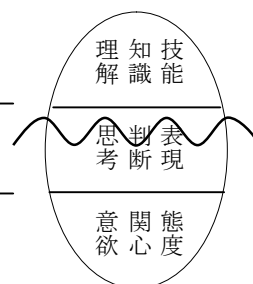


図2

力”とし(図1)、有名な氷山の学力モデルの「見える学力」に当たるのが、A学力とB学力の一部、「見えない学力」に当たるのが、B学力の多くとC学力であると対応付けています(図2)。志水はこの著書の中で、これらの学力の関連性を樹木に例えてイメージ化しながら分かりやすく説明しており、学力を育てるポイントとして、バランスよく各学力を育てることも大切だが、特に大切なのは、根底にあるC学力を育むことであると説いています。

冒頭の「はじめに」でも触れられていますが、本事業は、高校生が身に付けるべき幅広い資質・能力、特に、筆記試験等では評価が困難な資質・能力について、いかに評価を行えばよいか、また、その妥当性の確保や信頼性の向上等に向け、高等学校での多様な学習成果についてどのような評価手法を取り入れていけばよいかについて調査研究を行うものです。まさに先ほどの、見えにくい点数化が難しい「見えにくい学力」に当たるB学力、C学力の部分について、評価の在り方、その信頼性と妥当性について研究し、指導と評価の一体化を図りながら、我々の授業改善及び生徒の資質能力の向上を図っていこうというものです。

本年度は、研究のスタートが12月ということもあり、まずは評価手法に関する知識を身に付けるために、大学の先生方から講義をしていただいたり、類似の研究に先進的に取り組んでいる教育機関や学校に視察を行ったりして、研究協力校の実践研究に反映させていきました。まだ研究は始まったばかりで、研究成果はそれほど多くはありませんが、大学の先生方から指導助言いただきながら、総合教育センターでの研究及び研究協力校における実践研究を進めることで、課題が明らかになり、研究の方向性が徐々に定まりつつあります。

次年度は、研究の対象を英語と理科に国語、社会、数学を加えて5教科に拡大し、本年度の研究の成果と課題を生かしながら、各学校で参考にしていただけるような多様な学習成果に関する評価手法を研究していきたいと考えております。

愛知県総合教育センター

教科研究室長 齋藤 育浩

平成25年度
高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究
研究成果報告書

平成26年3月7日 印刷

編集 愛知県総合教育センター

〒470-0151

愛知県愛知郡東郷町大字諸輪字上鉾68

電話 0561-38-2211

Fax 0561-38-2780
